

熊本県立多良木高等学校

(平成 20 年度県立学校等人権教育ブロック別研究協力校)

I 研究の概要

1 研究主題について

(1) 研究主題

『個』を大切に、『公』も大切にできる心豊かな生徒の育成をめざして
～家族・地域の人たちとの関わりを支援する取組～

『個』とは 自分のものであり、自分の特性を伸ばし、目標を定め、自己実現を
目指して日々努力する生徒のものである。

『公』とは 自分が属する社会、自分が生まれ育った地域、学校の先生や仲間、
そして、家族のものである。

生徒一人一人が、学校や地域・家庭の中で、そこに生まれ育ったことに誇り
をもち、家族・地域住民や学校の先生・仲間と助け合い励まし合って、その集
団の一員として生きていく心豊かな生徒の育成をめざしている。

(2) 主題設定の理由

① 人権教育の今日的課題から

「人権教育の指導方法等の在り方について [第三次とりまとめ]」で述べ
られている「学校における人権教育の目標」から、生徒や地域の実態に
応じて目標を具体的に設定するとともに、「個」と「公」を大切にできる生徒の
人権感覚を育むために、生徒の主体的な取組を尊重し、人権尊重の精神に立
った学習活動づくり・人間関係づくり・環境づくりが一体となった取組を進
めていく。

② 本校の教育目標から

くまもとの教職員像「認め・ほめ・励まし・伸ばす」をすべての教育活動
の基盤に据え、目指す生徒像を「志高く キラリ輝く 多高生」とし、本校
の教育目標として、「進路目標を達成させるため、学力向上を中心とした諸
施策の更なる充実を図るとともに、社会が必要としている人材の育成を図る
こと」を掲げている。

そして、学校の教育活動全体を通して人権教育の推進に努め、生徒一人一
人が、自己実現をめざし、社会との関わりを自覚し行動できる力を身に付け
ることをめざしている。

③ 生徒の実態から

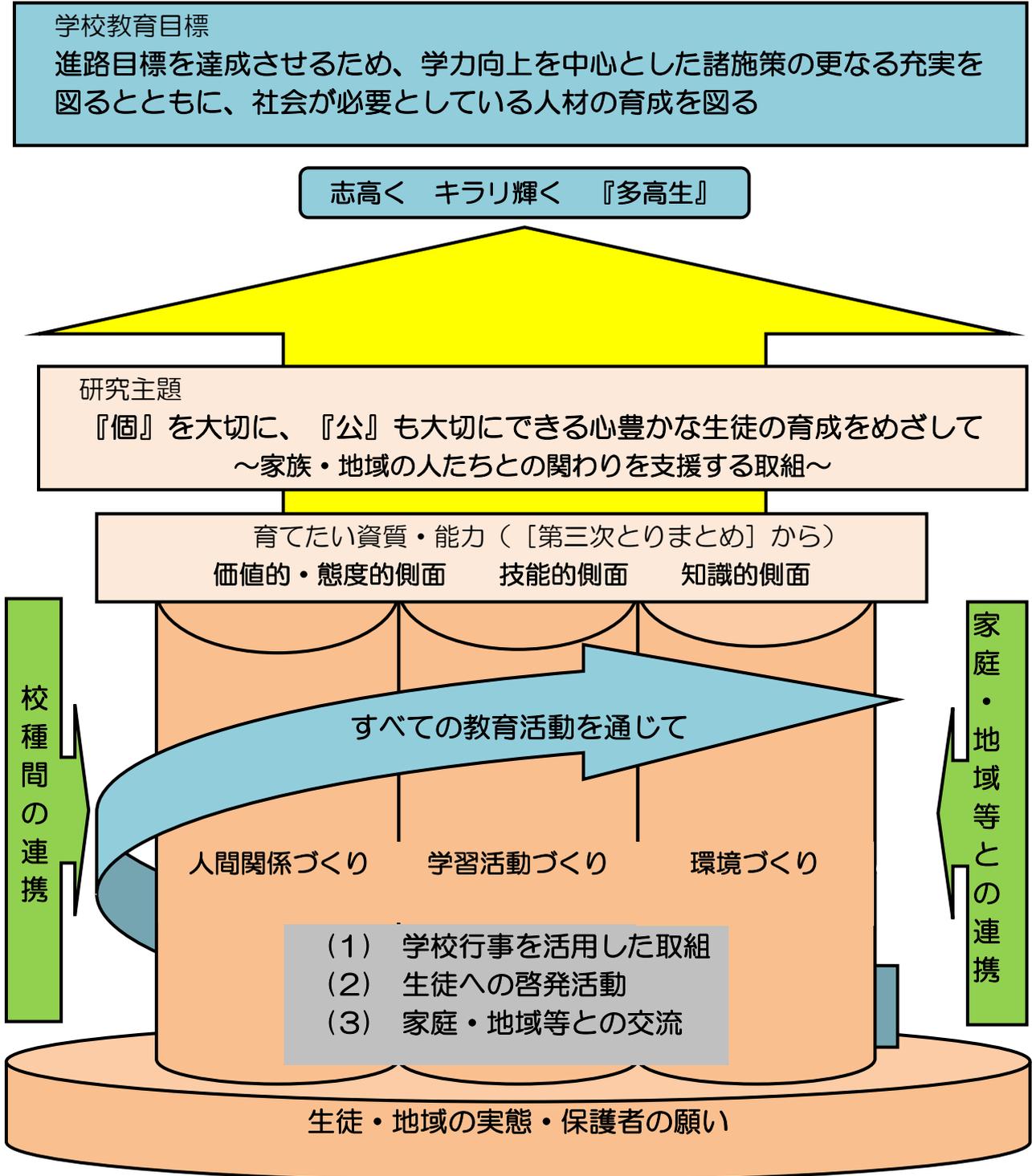
生徒の多くは、自分の生きる力のもとになっている家族の存在を、特に意
識することなく生活している。自分が生まれ育った地域を知り、先生や仲間
と助け合い、家族の一員としての役割を認識して生きていく力を育むことを
大切にしている。

2 研究の仮説

すべての教育活動を通して、家庭・地域等との連携を基盤にした人間関係づくりや学校行事を活用した取組並びに生徒への啓発活動を行えば、人権教育を通して育てたい資質・能力が身に付き、『個』並びに『公』を大切にできる心豊かな生徒の育成ができるであろう。

3 研究の構想

(1) 研究構想図



(2)人権教育を通して育てたい資質・能力

人権教育は、人権に関する知的理解と人権感覚の涵養を基盤として、意識、態度、実践的な行動力など様々な資質や能力を育成し、発展させることを目指す総合的な教育である（[第三次とりまとめ]）。

本校は、このような人権教育を通じて培われる資質・能力として、特に、①人権尊重の概念に関する知識、②他者の思いを共感的に受容し主体的に生活を向上させる態度、③協力的・建設的に問題解決する技能の深化を図り、自他を尊重する人権感覚や人権問題を解決する態度や行動力を育てていくことにした。

(3)研究の視点

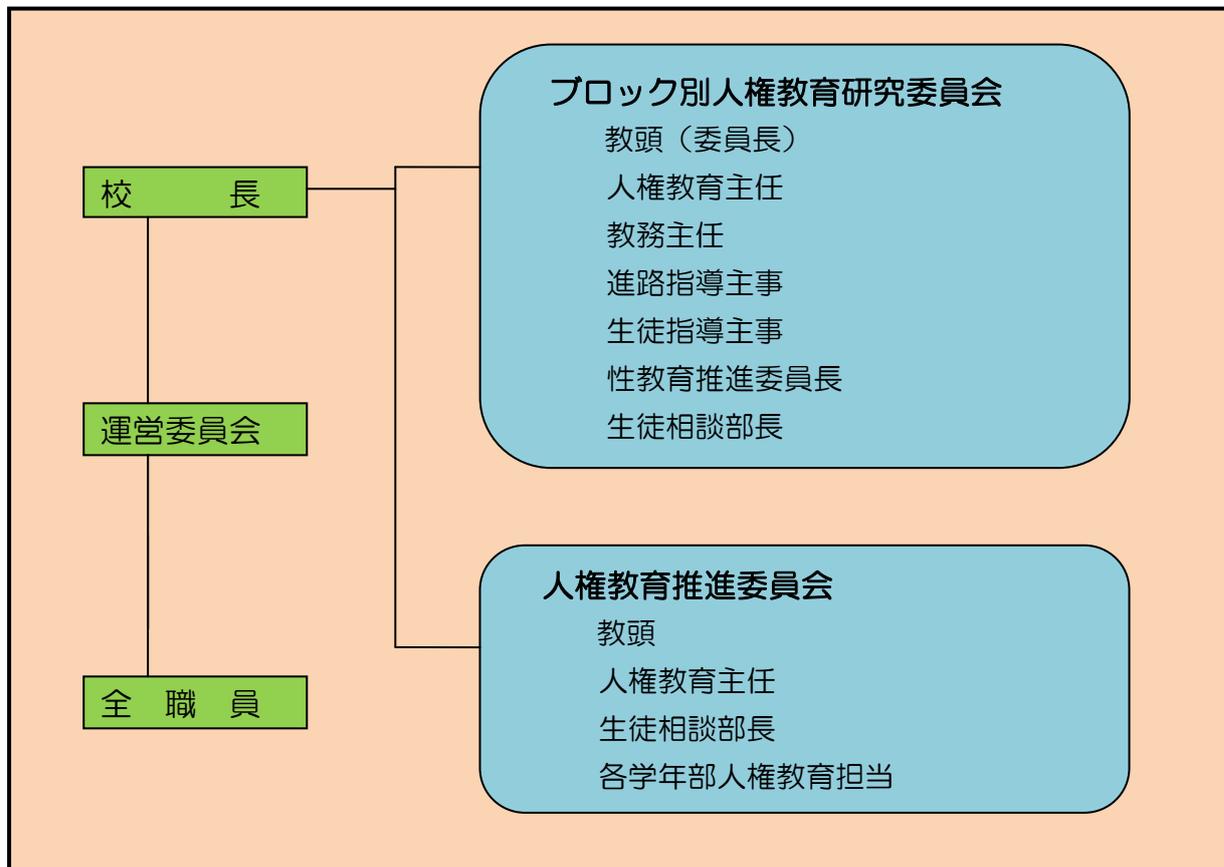
①学校の教育活動全体を通じた人権教育の推進

人権尊重の精神に立った教育環境のもとで、望ましい人間関係づくりの能力や人権尊重の意識と実践力を養うために、生徒への啓発活動や学習活動及び学校行事を活用した取組を行う。そして、これらを通じて、豊かな人権感覚や人権問題を解決するための態度や行動力の育成を目指す。

②家庭・地域、関係機関との連携及び校種間の連携

保護者・地域住民等の思いや願いを受け止めた人権教育を推進するため、学校における学習の成果を肯定的に受容する家庭や地域の基盤づくりに努める。また、人権問題を解決するための生徒の人権感覚や実践的行動力の育成を図るため、校種間連携の強化を図り人権教育に対する理解と協力を促す。

(4)研究組織及び推進体制



II 研究の内容

1 人権感覚を育む学校づくりのための取組

(1) 学校行事を活用した取組

① 性教育講演会

「DV未然防止教育～お互いを大切に
より良い関係を築くために～」と題して原健
一氏（佐賀県DV総合対策センター所長）に
講演いただいた。

自分らしさを大切に、相手に「NO!」といえる関係をつくり、困った
ときは助けを求めることが必要と話された。講演後のアンケートでは、「怒
鳴ったり、心を傷つけたり、無視したりすることも暴力になる」「自分の意
見を抑えて相手に従うことはすべきでない」と思うようになった生徒が増え、
自分を大切にすることと相手も大切にすることのあり方を学ぶことができた。



性教育講演会

② ひとり芝居の公演

『地面の底がぬけたんです』と題して、結純子さん
による、あるハンセン病回復者の不屈の人生を扱った
芝居を地域の方々とともに鑑賞した。

公演は幼少の幸せな頃からはじまり、発病後の暗闇
の中を這って便所に行く姿、夫の入れ歯を口で洗う姿
などの老年時代までを一人で演じられた。

生徒は「迫力に驚いた。想像もつかないような差別、
偏見があったのだと知った」と感想を述べ、迫力ある
演技を通して差別をされた方の思い等の理解を深めた。



掲載：熊本日日新聞社

③ 人権教育コーナー

文化祭会場に人権教育コーナーを特設し
て、応援メッセージ、応援メッセージへの
返し、親子対抗綱引き競技の感想、「親に
言われて励みになった言葉と傷ついた言葉」
等を掲示した。

保護者への啓発ばかりではなく、生徒が
友だちのよいところを発見し、自分自身の
生活に活かすよい機会となった。



人権教育コーナー

④ 親子対抗綱引き競技（体育大会）

親（保護者）と子の交流の機会を設ける
ことにより、生徒自身が家族（身近な人）
とのつながりを実感することができた。

生徒の感想には、「親の力が強くて負け
たけど、来年は頑張りたい」「とても盛り
上がっていて、見ていて楽しかった」「親



親子対抗綱引き大会

と話せる機会ができた」と、肯定的な見方が多かった。

(2) 生徒への啓発活動

①人権アンケート

高校生の間でも、コミュニケーション能力の希薄さやメールによる中傷等に起因して相手を傷つけるなどの問題事象が起き、全国的にも教育上の重要な課題となっている。このことを踏まえ、本校では、「生徒が楽しく学校生活をおくる」ことを目的とした人権学習の深まりを期して、生徒の実態を把握するためのアンケート調査を行った。

結果として、「相手が不愉快になることをしたことがある」(23.6%)、「不愉快になることをされたことがある」(20.4%)と、同学年やクラスで相手を不愉快にすることが起きていることが分かった。

また、「相手が不愉快になるような言葉・態度・行動をなくしていくために、どのようなことをしたらいいと思いますか」という問いに対しては、「先生から注意してもらおう」「生徒会など、生徒自身による取組をする」との回答があり、教師のかかわりや指導方法の改善、生徒が課題解決のために主体的に取り組む場面を設定することが必要であることが分かった。

②人権学習

個別の人権課題についての学習のほかに、ロールプレイング「伝えよう わたしメッセージ」を全学年で実施し、自分の感情を適切に表現するアサーティブネスを身に付けるとともに、言葉によるいじめ問題について考えた。

生徒たちは、この学習から「日常の会話において相手の気持ちを受け入れて、自分の気持ちも相手に伝えるには何が大切か」を体験的に考え、「友人を大切にすることは自分を大切にすることにつながる」ことに気付いた。

③全校終礼

毎月1回、全校生徒による終礼を実施し、職員による様々な講話を通して、自分自身の生き方について考えさせる機会とした。また、これを利用し、年度当初に、1年間の人権教育の取組について生徒全員に知らせ、協力を呼びかけた。

12月には、人権週間にちなんで、本校の校訓「平和 勤労 進取」を取り上げ、平和こそがお互いの人権を尊重するために大切であるとの講話を行った。



生徒終礼(12月)

④職員研修

人吉農芸学院法務官をされていた和田英隆氏に「生徒への関わり～ロールレタリングを通して」と題して講演をしていただいた。ロールレタリングは、青少年の更生施設で取り入れている方法で、自分の伝えたい相手に手紙を書かせて、その書いた相手の立場になって自分宛に手紙を書かせるというものである。

人を思いやり、コミュニケーションを図るのに効果があったことを話され

て、本校で取り組んでいる人権教育の取組に示唆を与えてもらった。

⑤人権を考える集会（LHR）

「家族の週間（11月9日～22日）」にちなみ、生徒自身の主体性を大切に、生徒会の企画による人権集会に取り組んだ。

ねらい

いじめ等、自分たちの身のまわりにある人権問題や子どもに寄せる保護者の思いなどについて意見を交わすことにより、身近な人たちとのつながりを意識し、自他ともに大切にする態度を育む。

主な学習活動	指導者の支援および留意点
<p>(1)人権集会の趣旨等を説明する</p> <ul style="list-style-type: none"> 「人権アンケート」に基づいて、自分たちにできることは何かという視点で集会を企画したことを伝える。 <p>(2)「人権教育に関するアンケート」の結果、「応援メッセージ」「応援メッセージへの返し」「親子対抗綱引き」の感想、「食のアンケート」に基づいて、家族の大切さ等についての考えを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 親に言われてうれしかった言葉 親子で同じ競技をすることの楽しさ 家庭内で一緒にとる食事の大切さ <p>(3)それに対する意見や感想を発表する。</p> <p>(4)今後の学校生活を送る上で大切になることをスローガンとして決める。</p> <ul style="list-style-type: none"> 標語の中から「人は皆笑顔でいたい いつまでも」を提案する。 拍手で承認を得る。 生徒会総務で校内に掲示することを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○お互いの顔が見えるように、並び方をコの字型にする。職員は生徒の外側に座って聞く。 ○生徒の主体的な集会となるように、生徒会総務で司会進行を行う。 ○アンケート結果を書いた大きなカードを提示する。 ○「1年間の目標」に対する保護者の「応援メッセージ」や生徒による「応援メッセージへの返し」等を、事前に生徒会総務で選んでおく。 ○全生徒に問いかける項目を、事前に生徒会総務で考えておく。 ○お互いの考えを深め、つながりを広める機会となるように支援していく。 ○1学期募集したいじめに関する標語の中から、事前に生徒会総務で選んでおく。 ○標語は事前に広用紙に書いておく。
<div data-bbox="438 1765 821 2004" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="478 1966 750 1998">スローガンを全体で決定</p> <p>(5)まとめをする</p>	<div data-bbox="1050 1720 1439 2049" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="1212 2016 1316 2049">人権集会</p>

(3)家庭・地域等との交流

①生徒と保護者の心の交流

生徒一人一人が立てた目標や学校行事に参加した思いなどを保護者に伝え、それに対する保護者の思いを生徒に返す取組を行い、普段あまり意識しない家族との絆を改めて考えてみる機会とした。生徒と保護者の心の交流を図ることにより、生徒には、保護者の思いを胸に学校で張りのある生活や周囲への心配りができるなど豊かな心が育まれること、また、保護者には、生徒の思いを知ることにより我が子や学校への思いを深めてもらうことを期待した。

ア 1年間の目標を立てよう

生徒一人一人が自分の学校生活を豊かなものにするには、自身の生活をしっかりと見つめ直すことが大切である。

そのために、「私は、今年これ（このようなこと）で輝きたい」というテーマに沿って、学校生活に対する思いや意欲を込めた1年間の目標を立て、自己存在感を高める取組の出発点とした。

イ 応援メッセージ（1学期末保護者会）

保護者が子どもの1年間の目標を知ること、子どもの取組を認め、支援するような家庭環境が作られることを期待するとともに、先生へのメッセージにより、自分自身が多くの人に支えられていることを知り、自己存在感を高めることを目標に取り組んだ。

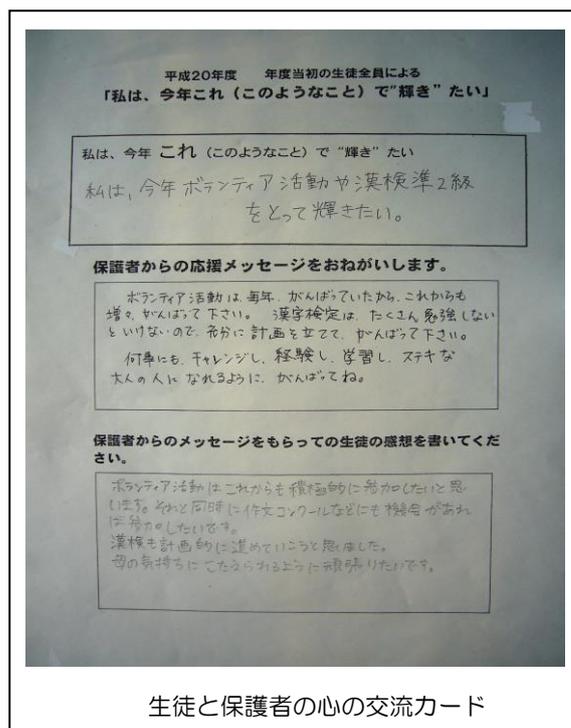
保護者からは、我が子の1年間の目標「私は、今年これで輝きたい」に対して、生徒が元気になるようなメッセージがたくさん寄せられた。

ウ 応援メッセージの返し（2学期・始業式）

自分の1年間の目標に対する保護者からの「応援メッセージ」は、家族の思いを知るよい機会となる。そして、その思いや願いに対して自分の考えや感謝の気持ちを返していくことによって、互いのつながりを確認していく場にした。

②球磨養護学校との交流

障がいのある児童生徒と一緒に活動することで、人間は一人一人が個性をもった存在であることを知り、自他の違いを認め、



お互いを尊重し合う態度や相手を深く理解しようとする態度の育成に取り組んだ。

球磨養護学校の生徒を本校に招き、1年体育コース・福祉教養コースの生徒と交流活動を行い、施設紹介やティーボールを行った。ティーボールの試合前に、ルールや競技内容について生徒から説明し、混合のチームに分かれて試合をした。

交流学習を通して、養護学校生徒を思いやる態度、協力する態度、コミュニケーションを積極的に取ろうとする態度が見られるようになった。交流後も、感想文を交換するなど、発展的な活動が見られた。

③にこにこふれあい大作戦

本校の家庭クラブ（3年福祉教養コース）の奉仕的活動と、体育コース及び福祉コースの体験学習と併せて実施した。交流を通して高齢者の暮らしにふれることで、地域の福祉行政や高齢化社会の課題を理解するとともに、社会的な貢献の意義について考える機会としている。

生徒たちは、普段は食べる機会が少なくなった郷土料理を、地域の高齢者と調理し、一緒に食することで、お互いのつながりを感じるとともに、伝統的な食文化を体験することができた。

また、ゲームやグラウンドゴルフを共に楽しむことを通して、人をいたわることや相手の立場に立って考えることを学び、それらを実践に移すことができた。

さらに、福祉教養コースの生徒は、福祉に関する関心や意欲が高まり、卒業後の活動に活かそうという気持ちも高まった。

交流後には、地域の高齢者からいただいたお礼の手紙を、PTA広報誌に掲載し、家庭へ発信した。



自分たちが作った料理を、喜んで食べてくださって、いい経験となりました。（生徒感想）



楽しいゲームをしてふれあうことができて楽しかったです。みなさんの笑顔が嬉しかったです。（生徒感想）

◇参加者

3年生体育コース、福祉教養コース
多良木町老人会（20～30名）

◇場所

町のコミュニティーセンター

④学校評価アンケート

本年度の反省と次年度への課題を探るため、毎年、生徒・保護者に対し、学校全般についてアンケートを実施している。人権教育についての項目では、「人権教育の推進に力を入れている」の問いに肯定的な生徒は67.7%（前年比25.1%増）、保護者は64.7%（前年比3.8%増）となった。

Ⅲ 研究の成果と課題

(1)生徒への啓発活動

- 生徒の多くが、自分の1年間の目標に向けて頑張り、研究主題である「個も大切に公も大切に作る気持ちをもつようになった」と感じ、1年間の自分の成長を自覚している。
- 生徒会主催の「人権を考える集会」を開催したことで、人権教育を進める上での雰囲気づくりができた。また、その集会において、他の人の気持ちや考えを多く聴けたことで、自分を見つめ直し、生き方を考える取組となった。
- 周囲のことを考えて行動するようになったと感じる生徒が増加した。

(2)家庭・地域等との連携

- 保護者は生徒の学校での様子や思いを知り、生徒は保護者の気持ちを知り、家族や地域の人々の支援を実感し、感謝の気持ちをもつ生徒が多くなった。
- 人権課題の当事者との交流活動により、相手を理解し、積極的に関わろうとする態度や自分自身の生き方を考える姿勢が生まれてきた。
- 学校行事や保護者会等への出席率の向上に見られるように、学校への理解や協力が進むなど、学校と家庭の連携が深まった。

(3)学校行事を活用した取組

- 人権に関する講演の取組により、DVやハンセン病等、人権課題への知的理解が深まるとともに、人権課題に取り組む人々の思いに共感する生徒が増加した。
- 学校行事について共通の話題を持てるようになり、家族の会話が増えたと実感する生徒や保護者が増加した。

家庭や地域の協力を得た活動を通して、「自分の大切さとともに他の人の大切さを認める」環境づくりに取り組むことができた。これは、本校の人権教育の推進にとって大きなステップとなるものであり、今後も継続して行っていきたい。

また、生徒一人一人が、よいところは認め合い、励まし合い、高め合うような人間関係づくりを学校生活において日常的に深めていくために、教職員が自身の人権意識を高め、意欲的な参画のもと、学校総体として人権教育を充実させていくことが必要である。